

保科孝一先生

吉田澄夫

先生はいつも口ぐせのように言っていた。『田中館先生のような晩年を送りたい』。その当時田中館愛橋博士は老いてます／＼と健健で、ローマ字運動の先頭に立って活動していたので先生は田中館博士を直接の目標とされたようで、八十三才のよわいを重ね、国語問題のために尽力されたのは、まことに偉大な晩年であったと申さなければならぬ。最後の病床においても、なお先生は原稿の加筆をされていた。輸血とリンゲル注射だけでもっているような重態の時であった。見舞いの人々に対しては、その人に最も適切な短い言葉をふた言み言与えられた。土岐善麿博士から「さいたのであるが、」審議会のことは、あせらずに、ジツクリやってくれ給え」と先生は言われたそうである。土岐博士はその言葉を反スウするように静かにくり返していられた。

先生の公生活は、東京文理大その他諸大学における講壇生活の面と、文部省の国語調査委員会のあとを受けて、臨時国語調査会・国語審議会の幹事もしくは幹事長として、事実上国語調査の中心に立たれ、事業を推進して来られた国語運動者としての面とが考えられる。

わたくしなどが、先生のもとで仕事をしようになつた昭和はじめ以降のことを回想すると、先生は最も多くの時間を文部省の国語調査室で過ごされたのではないかと思われるのである。

学校の講義をすまされると、たいてい文部省にやって来られる。そして用のない限り、終日読書か調査執筆に時を過ぎられる。

昭和はじめの臨時国語調査会時代には、会長は上田万年博士委員には杉村登人冠、巖谷小波、千葉亀雄、籾田鉄次郎、増田義一、伊原青々園、長谷川天笑というような人々、幹事は先生で、月に一度ぐらい会合を開いた。昭和九年以後は国語審議会となり、文部大臣の諮問機関とかわり、委員も一新した。

臨時ローマ字調査会は昭和五年十一月に設置されたが、同十二年九月の内閣訓令が出るまで、前後七年間にわたるローマ字論争は実に烈しいものであったが、この審議がローマ字問題ひいては一般の国語国字問題に及ぼした直接間接の影響は大きなものであった。そして以上のような国語問題機関の中心にはいつも先生が立っていられた、事実上先生なくしては、とうてい進展しなかつた事業であるとわたくしなどは信じている。

戦後国語問題の諸懸案が一応の解決を見、実施に移されたころ、遠慮のないわれ／＼若い者が「先生はいつ死んでも、もう心残りはありませんね」というと、先生はそれを素直に受けて「まず、そうだね」といって笑っていられた。

文部省の国語調査室における先生は、極めて寛大な先生であった。仕事についてやかましいことは少しも言われなかつた。当時、室には湯沢幸吉郎氏ほか二三の人が調査に従事していた。新村出先生とか安藤正次先生とか、そのほか様々の方が先生をたずねて見えた。そういう方々の談笑を、かたわらで聞いているのもまた楽しいものであった。